

いま、語りつぐ

平和への願い XI

非核平和都市宣言 25 周年記念事業

平和特別講演会の記録

---- 沖縄から美ら唄^{ちゅ うた}、平和を！ ----



平和祈念公園～摩文仁上空より～（公益財団法人 沖縄県平和祈念財団 提供）

宝 塚 市

発行にあたって

宝塚市は、平成元年（1989年）3月7日に「非核平和都市宣言」を行い、平成15年（2003年）9月19日には「宝塚市核兵器廃絶平和推進基本条例」を施行し、これらの理念、規定に基づき、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民とともに毎年様々な平和事業を進めています。

昨年、我が国は戦後70年を迎えました。この間、幸いにも我が国には戦争がなく平和な社会が続いています。しかし、戦後のこの平和が、未来永劫続くという保障はどこにもありません。恒久平和の実現のため、今、生きている私たちが平和を守り、育て、語り継いでいかねばなりません。

平成26年12月、本市は、あの凄惨で醜い沖縄戦を体験した大田昌秀元沖縄県知事をお招きし、「沖縄から平和を願う」というテーマでご講演をいただきました。

また、同時に開催しました「平和の歌ミニコンサート」では、沖縄民謡歌手の古謝美佐子さんと音楽家の佐原一哉さんによって沖縄の心が歌われ、平和への願いが語られました。

この冊子は、大田さんの講演記録を中心にまとめています。大田さんは、現在、NPO法人沖縄国際平和研究所理事長として、平和活動を続けられています。この講演でも沖縄戦や現在の基地の状況などを踏まえ、沖縄から平和をつくっていきたいという強い思いが語られました。

宝塚市の素晴らしい自然と明るく穏やかな暮らしは、市民の「宝」です。この「宝」を守り、未来ある子どもたちを二度とあの悲惨な戦火にまみえさせないように、大田さんの平和への熱い思いを貴重なメッセージとして胸に刻み、宝塚からも平和をつくっていったらと考えています。

この冊子の発行にご理解ご協力をいただきました大田さん、古謝さん、佐原さん並びにNPO法人沖縄国際平和研究所、写真等の提供をいただきました沖縄県及び各市町、関係団体に心から感謝申し上げますとともに、この平和冊子を一人でも多くの市民の皆様にお読みいただき、戦争の悲惨さ、平和の大切さ、命の尊さについて考え、いかなる困難があろうとも二度と再び戦争を起こしてはならないことを誓い、平和をつくる活動にご協力をいただきたいと心から願っています。

平成28年（2016年）3月

宝塚市長

中川智子

目 次

1 平成 26 年度平和特別講演会記録	1
第 1 部 平和の歌ミニコンサート	1
第 2 部 平和特別講演	5
平和とは何か	6
沖縄戦の教訓 ～軍隊は非戦闘員を守らない～	6
平和創設に当って一番の障害は軍事基地	7
沖縄の平和思想 ① ～石垣島事件と仲原善忠～	8
平和行政の 3 本柱と平和の礎（いしじ）の建立	10
私の沖縄戦体験	12
沖縄の平和思想 ②	15
6・23 慰霊の日のこと	17
最後の戦場での出来事	18
辺野古への移転を拒否する理由	19
基地問題と沖縄戦	20
いまだ続く“沖縄戦”	22

辺野古の海は住民の生活の源	24
辺野古移転、米軍側の真意	24
辺野古への移転計画の契機	25
半世紀前からの辺野古移転計画	26
基地返還後の実情	27
沖縄と憲法	27
平和な沖縄をめざして	27
いとし子よ……永井隆さんの遺言	28
用語説明	31
2 非核平和都市宣言文	35



非核平和都市宣言 25 周年記念事業

平和特別講演会記録

と き 平成 26 年 12 月 14 日（日） 午後 1 時 30 分～
ところ 宝塚市文化施設 ソリオホール

平和特別講演会 ---- 沖縄から美ら唄、平和を！ ----

第 1 部 平和の歌ミニコンサート

1 出演

古謝美佐子さん（ボーカル、三線）
佐原 一哉さん（キーボード、MC）

2 プロフィール

古謝美佐子さん



古謝美佐さんは、沖縄県嘉手納町生まれで、沖縄民謡女性歌手の代表的存在。9才でレコードデビュー。坂本龍一さんのユニットや沖縄女性コーラスグループ「ネーネーズ」への参加を経て、1996年よりソロ活動が続いている。

古謝さん作詞の子守唄「童神」は、夏川りみさん、山本潤子さん、加藤登紀子さんほか、多くのシンガーにカバーされている。

科学者の研究で「古謝さんの歌には歌手の中で何万人に一人という高周波とゆらぎ成分を同時に持ち、人を癒したり、健康を促進する効果がある」という内容の分析結果が発表され話題となりました。

最近、初代「ネーネーズ」の宮里奈美子さん、比屋根幸乃さんなどと共に、4名グループ「うないぐみ」でも活動を行っている。

さほらかずや 佐原一哉さん プロフィール



さほらかずや
佐原一哉さんは、福岡県生まれの音楽プロデューサー、
キーボード奏者、作詞作曲編曲家。

こじやみさこ
古謝美佐子さんや「うないぐみ」の総合プロデューサー
であると共に、たくさんの方々の曲を作り、脚本も手
がけている。

3 コンサート曲目

かい 月ぬ美しや～島々清しや

月ぬ美しや（月の美しさ）は、八重山地方から伝わった沖縄民謡で、主に童謡として唄われ、NHKの『みんなのうた』でも放送されたことがある。

島々清しや（島々の美しさ）は、沖縄の自然の美しさを歌った歌で、作詞は久米 仁、作曲は普久原恒勇。

あさどや 安里屋コンタ

沖縄県の八重山諸島の竹富島に伝わる古謡。琉球王国時代の竹富島に実在した絶世の美女・安里屋クヤマと、王府より八重山に派遣されクヤマに一目惚れした目差主（みざししゅ。下級役人）のやり取りを面白おかしく歌っている。作詞は星克、作曲は宮良長包。

子守唄メドレー

竹田の子守唄

京都市の被差別部落に伝わる守り子歌で、子守の仕事をしている子どもの労働歌。

江戸の子守唄

日本の伝統的な子守唄で、江戸から始まって各地に伝えられて、日本の子守唄のルーツになったといわれている。

うふむらうどうん
大村御殿

有名な沖縄の子守唄で、なかなか寝つかない赤ん坊に音を上げて、怖いお話を聞かせて何とか寝かしつけようとする唄。

五木の子守唄

熊本県球磨群五木村に伝わる子守唄で、熊本県を代表する民謡。赤ちゃんをあやす唄ではなく、子守娘の気持ちを唄った「守り子唄」。

二見情話

名護市二見の美しい自然と人情を甘ずっぱくうたった恋歌。土地讃歌。

黒い雨

江州音頭の音頭取り、初代桜川唯丸氏が1991年に発表した曲。広島・長崎の原爆投下後に降ったといわれる、放射性物質を含んだ雨を歌った歌。作詞・作曲は佐原一哉。

アメイジング・グレイス（沖縄方言版）

Amazing Grace（すばらしき恩寵）は、イギリスの牧師ジョン・ニュートン(1725～1807)の作詞による讃美歌。ゴスペルの名曲。

花～すべての人の心に花を～

この歌には世界に向けた平和へのメッセージが込められており、世界60か国以上で、多数のアーティストにカバーされている。作詞・作曲 喜納昌吉。

わらびがみ

童神～天の子守唄～

NHKの朝の連ドラ「ちゅらさん」の挿入歌。生まれてくる赤ん坊の幸せを願う歌。作詞は古謝美佐子、作曲は佐原一哉。

4 コンサートの内容

コンサートでは、歌の説明のほか、歌の合間に、島が違えば言葉が違うという沖縄の方言の話、沖縄の戦争体験者が死に際して話した「壕で母を殺さざるをえなかった子ども」の話、沖縄では老人は80歳を超えてからという年齢の話、沖縄は老人を敬い子どもが多いという話、辺野古への基地移転の話、沖縄に米軍基地がなくなるようにと全国

の人に思っしてほしいという話などを交え、いつまでも平和が続きますようにとの願いを込めて歌と演奏が行われ、感動の内に終演しました。



平和の歌ミニコンサートの様子



第2部 平和特別講演会

1 講師

おおたまさひで
大田昌秀さん

(元沖縄県知事・現特定非営利活動法人(NPO 法人)沖縄国際平和研究所理事長)

2 テーマ

沖縄から平和を願う

3 講師プロフィール



大田昌秀さんは、大正14年(1925年)、沖縄県久米島の生まれ。15歳の時沖縄師範学校に入学、昭和年20(1945)年3月、師範学校在学中に鉄血勤皇隊てっけつきんのうたいの一員として沖縄守備軍に動員され、10月下旬に捕虜となって生還するまで沖縄本島南部の日米最後の激戦場を生きぬいた。

その後、沖縄文教学校、沖縄外国語学校を経て、早稲田大学に入学。教育学部で英語を学び、卒業後アメリカのシラキユース大学大学院に留学し、ジャーナリズムを学ぶ。

その後、琉球大学教授、アメリカのアリゾナ州立大学教授、また琉球大学法文学部長など大学での要職を歴任し、平成2(1990)年の沖縄県知事選に立候補し、見事初当選。2期8年の知事時代は、「平和」「自立」「共生」を目標に全力を傾注してその実現を図る。

その後は、参議院議員も一期務め、現在はNPO法人沖縄国際平和研究所理事長として、沖縄から全世界に向けて「平和」の創設に尽力している。

4 平和特別講演 ----沖縄から平和を願う----

ご紹介をいただきました大田でございます。お許しをいただいて腰かけさせていただきます。

今日は「沖縄から平和を願う」というタイトルでございますが、平和を願うというよりか、「沖縄から平和をつくる」という趣旨でお話し申し上げたいと思います。

先ほど宝塚市の資料をいただきましたが、宝塚市がいかに平和の創設に関心を持っているかを知って、大変うれしく思うとともに心から敬意を表す次第でございます。

平和とは何か

さて、平和とは一体何かという問題があります。一般的に平和とは“戦争のない状態”というふうに受け取られています。

ところが、ノルウェーにヨハン・ガルトゥングという世界的に有名な平和学者がいます。私は、ガルトゥングさんを沖縄にお招きして対談したことがありますが、彼は、戦争というのを直接的暴力と規定しています。そして、学校のいじめの問題とか女性差別の問題、男女の経済的格差の問題とか、よその国の文化を見下したりするのを構造的暴力と規定し、こうした構造的暴力をなくしていくことこそが、積極的平和をつくる方法だと説いています。

ガルトゥング氏は、20代の若い頃に、ノルウェーに国際平和研究所を設立しています。そのため、私が、若い頃に国際平和研究所を作った理由を質問したら、彼は、ある晩、父親がドイツのナチスに引っ張られていったさい、こんな世の中でないような世の中をつかってほしいと一言言い残したそうです。それでガルトゥング氏は、若い時に国際平和研究所を作って、世界的な平和活動をやってこられたというわけです。

沖縄戦の教訓 ～軍隊は非戦闘員を守らない～

ところが、私たちが日常生活の中で、平和をつくるということについては、個人や集団がいくら必死になって努力しても、なかなかうまくいかないわけですね。ご承知のとおり、現在日本では、集団的自衛権の行使が大幅に認められているほか、特定秘密保護法や有事法制が制定されたり、国民保護法ができたり、いろんな法律が次々にできています。なぜそういう法律をつくるのかと訊きますと、国民の生命財産を護るためというのです。しかし、戦前、有事法制みたいなものは300以上もありました。それにもかかわらず国民の生命財産を守れたかという、守れませんでした。私が参議院の外交防衛委員会にいた時、防衛庁長官が自衛隊をもっと拡大強化すべきだと言うので、何のためにそうするんですかと質問したら、国民の生命財産を守るために必要だと言うのです。

そこで私は、自衛隊法のどこに国民の生命財産を守ると書いてありますかと質問したら、防衛庁長官は答えきれないのです。するとスタッフがそばから自衛隊法を渡したんです。しかし、自衛隊法の第3条には任務が規定されていて、国家の平和と安全を守るとだけ書かれていて国民の生命財産を守るとは書かれていないのですよ。それで、苦し紛れに国家と国民は同じだと言うんです。

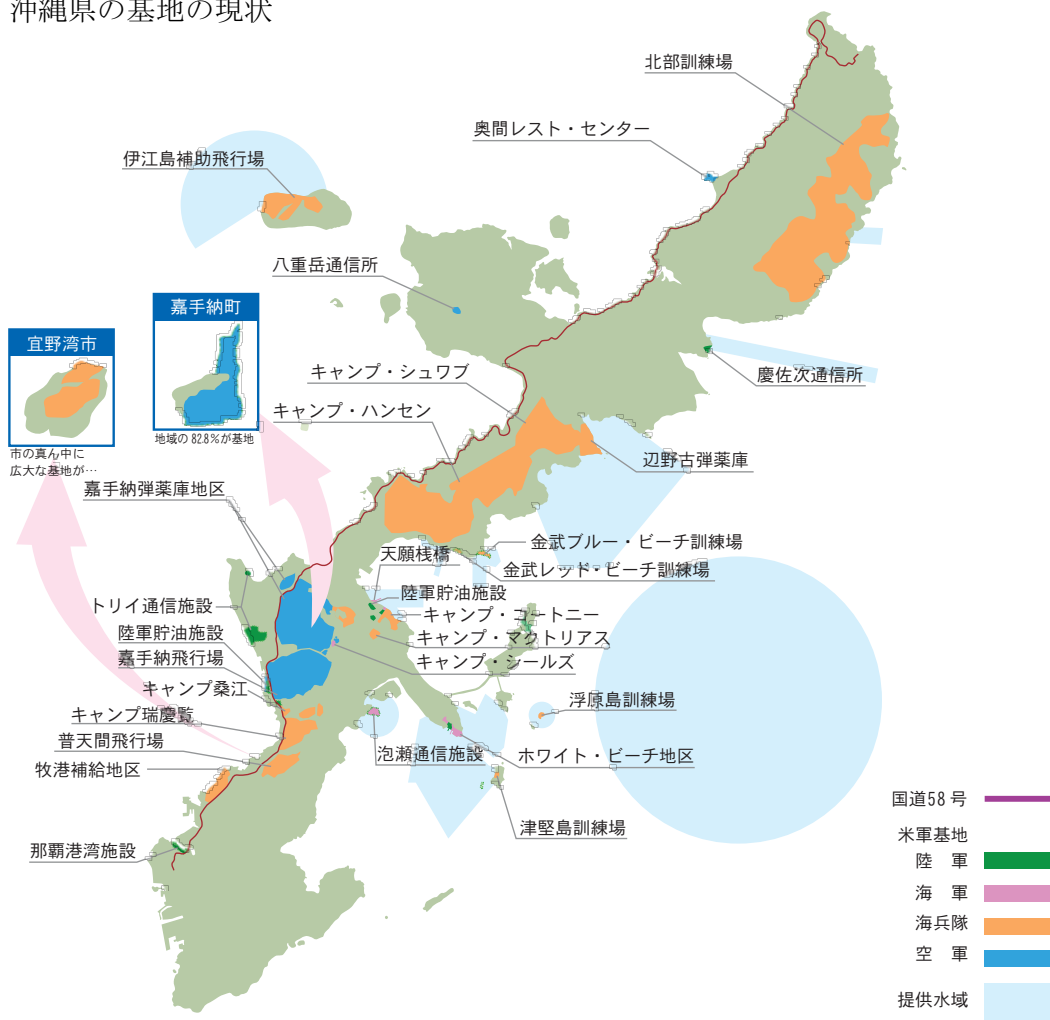
国民というのは、命を持った個々人の集合体です。そして国家というのは抽象的な概念なんです。ですから、国家と国民は同じだとは言えないわけです。

そういうふうに、私たちは常識的に軍隊というのは民間人の命を守ると思いがちですが、そうではないのです。そのことは、沖縄戦の唯一の教訓ですよ。すなわち、軍隊は非戦闘員の命を守る存在ではないのです。ですから沖縄では戦後70年の今以てそのことを繰り返し伝えているわけです。

平和創設に当って一番の障害は軍事基地

沖縄には過重の軍事基地があるため、これが平和創出の一番の障害要因になっています。現在、政府は普天間飛行場を沖縄本島名護市の辺野古に移設しようと計画していますが、そこでは92歳のおばあさんや88歳のおじいさんなどが座り込んで抵抗しています。いずれも沖縄戦の体験者で、二度とふたたび沖縄を戦場にさせない。子や孫たちに自分たちが味わった苦しみを体験させないということで座り込んでいるのです。座り込んで抵抗するのは普通2か月くらいで終わっちゃうのですが、辺野古では18年以上も座り続けているのですよ。それというのも、現在の日本の政治に非常な危機意識を持っているだけでなく、沖縄の軍事基地から派生する事件・事故が余りにも多すぎるからです。沖縄が日本に復帰して44年たちますが、その間に8,000件近くも米軍による事件・事故が起きているからですよ。

沖縄県の基地の現状



「沖縄の米軍基地」平成 25 年 3 月より (沖縄県提供)

基地周辺住民は日常的に命の危険にさらされているだけでなく、最近ではMV22 オス

プレイという事故多発のヘリコプターが 24 機も配備され、これが住民地域を超低空飛行して爆音をまき散らすので堪ったものではありません。以前に県では、専門家をお願いして、3 か年かけて米軍機の爆音が人体にどういふ影響を与えるかということ調査してもらったことがあります。嘉手納の手前に北谷（ちゃたん）町という町がありますが、そこで調査したところ、未熟児や難聴児が生まれることが判明しました。このように明らかに人体に悪い影響を与えているわけです。

沖縄の平和思想 ① ～石垣島事件と仲原善忠～

沖縄のように余りに基地が多いところに住んでいると、個人の力は何の役にも立たないと諦めてしまいがちですが、私たちには諦めるゆとりはありません。そのため、必死になって事態の改善に取り組んでいるわけですが、個人でも頑張っていけば平和をつくる上で成果を上げうるという一つ前例があることを申し上げたいと思います。

みなさんは石垣島事件というのをご存知でしょうか。八重山の石垣島で、1945 年 4 月 15 日にアメリカの爆撃機が撃墜されて、3 名のパイロットが捕虜にされました。

本来なら捕虜を捕まえたら国際法に従って、その捕虜を守備軍司令部に送り込み、軍法会議にかけて、罪があれば処罰することになるわけです。ところが、八重山を守っていた日本の海軍部隊が、捕虜を首里の守備軍司令部に送る飛行機もないし船もないからと言って、勝手に 3 名のパイロットのうち 2 人を日本刀で首をたち切り、1 人を銃剣で胸を刺して殺してしまいました。しかも、最初にこの捕虜たちに墓穴を掘らせて、そこに死体を埋めたんです。

ところが、9 月 2 日にミズリー号で日本が無条件降伏する署名をしたものですから、日本本土に帰っていたその関係者たちが、あわてて八重山に戻って来て、遺体を掘り起こして改めて火葬して、その遺骨をガソリン缶に詰めて西表島の沖合の一番深いところに沈めて証拠隠滅を図りました。ところが、それから 2 か年ほど経って、関係者たちのところに、横浜のアメリカ裁判所から呼び出しが来て裁判にかけられました。

何故この事件が露見したかと言いますと、この処刑に当たった将校が自分の当番兵が食事を持ってきた時に食事がまずいと言って当番兵に茶碗を投げつけたらしいんです。その当番兵が、それを恨みに思って、鹿児島からマッカーサー司令部に捕虜の虐殺事件があったと密告したようです。

その結果、1947 年に 46 名の被疑者中 41 名が死刑を宣告される判決が下されました。その中に沖縄出身者が 7 名いました。当初、8 名のうち 1 人だけが無罪になり、あとの 7 名が死刑を宣告されたのです。しかもその 7 名のうち 1 人だけが正規の軍人で、あとはみんな地元八重山の志願兵たちで、しかもそのうちの 3 名は 20 歳未満の未成年者でした。これらの若者たちも、日本軍将校の命令で既に死んでいる捕虜の胸を一突き突いたとのこと。3 名の捕虜の内 2 人は墓穴に埋めたのですが、1 人はちょっと反抗的だったということで、墓穴の一方の側に棒を立てて、既に死んでいる捕虜を目隠しして後ろ手にくくりつけ、海軍の隊長が模範突きといって捕虜の死体にまた銃剣で胸を突いた

だけでなく、部下50名くらいに交替で突けと言って、突かせたわけです。

その後、無罪になって放免された者が、死刑は重すぎる、命令した人と、命令を受けた人が一緒に死刑にされるのはひどすぎるといって、東京に出て行って減刑運動を始めました。当時、東京には沖縄連盟という組織があって、その会長は仲原善忠という歴史学者でした。仲原先生は成城学院の主事をされていた方で、この人に減刑運動をしていただきたいと訴えたのです。

沖縄では「ヌチドゥタカラ（命ど宝）」、命こそが何よりも宝だという言い伝えがあって、たえず命こそが何よりも大事だからそれを粗末に扱ってはいけないという言い伝えがあります。



講演会で平和を語る大田昌秀氏

仲原先生は早速、在東京の沖縄出身代表者 40 名くらいの署名を集めて、裁判官のアイケルバーガー中将に宛てて長文の嘆願書を出したわけです。その嘆願書の中で仲原先生はこんなことを書いています。

沖縄は昔から武器のない国でした。15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて尚真王という王様がいて、50 年間王位についていました。この人が沖縄三山の支配者たちの武器を取り上げて、首里の王様の倉庫に仕舞い込んだだけではなく、沖縄住民に一切の武器の携帯を禁止しました。ですから琉球の人々はいかなる武器を持つことができませんでした。

仲原先生はそうした沖縄の歴史的背景を書くとともに、さらに沖縄から空手が発達したのも、武器がないから素手でもって身を護るためと説いています。その上、「空手に先手なし」といって、空手は自から攻撃していくためではなくて、相手が攻撃してきた時に素手で身を守るためのものだとして解説しています。

ちなみに仲原先生は、沖縄の万葉集といわれる『おもろさうし』という有名な歌謡集の研究者です。『おもろさうし』は 12 世紀から 17 世紀までの一般の住民の生活万端を歌った古歌謡を 1530 種集めたものです。

それとは別に仲原先生は、『遺老説伝』といって、沖縄の古来からの説話や伝説を 142

話綴った本を取り上げて、両者の 1600 余りの資料を丹念にチェックしたところ、殺すという言葉がない。殺すという言葉がないのは、殺すという意識がない証拠だと書いています。

つまり、沖縄の人々は、いかなる武器も持たないだけでなく殺すという意識さえないにもかかわらず、日本軍の上官に命令されて一突き突いただけで死刑にされるのはあまりにもひどすぎるから刑を軽くしてほしい、と訴えたわけです。

私がアメリカの国立公文書館で資料収集をしているときに、その裁判の記録が出てきました。それを見ると、6名の裁判官の内4名の裁判官がこの仲原先生の嘆願書を読んで感銘し、慎重に審議しなければならないと話し合ったという記録が出てきました。そして裁判の結果、死刑を宣告された7名のうち職業軍人の1人だけが死刑のままで、あとの6名は死刑を免れました。若い20歳未満の3名は、死刑から一挙に重労働5年の刑に減刑されました。しかも最終的には、職業軍人も重労働35年で命は助かりました。

この結果から明らかなおとおり、仲原善忠先生が嘆願書を書いたおかげで7名の命が実際に救われたのですから、私たちは、個人では何もできないと諦める必要はないのです。

平和行政の3本柱と平和の礎（いしじ）の建立

私は、県にいるとき平和行政の3本柱を提示してその実現を図りました。まず摩文仁の戦場跡に平和祈念資料館を作り、その内容を充実させること。次いで、沖縄戦で犠牲になったすべての人の名前を石に刻みこんで残す「平和の礎」を建立すること。それから沖縄をキーストン・オブ・ザ・パシフィック（アジア太平洋地域のかなめ石）という軍事基地から「平和発信の島」に変えていくために、沖縄国際平和研究所というのをつくることにしたのです。



平和祈念資料館（糸満市 提供）

平和の礎については、普通、戦争で犠牲になった人たちの慰霊の塔を建立する場合は、

自国民の犠牲者の名前だけを刻みますが、私たちの場合は、敵国のアメリカ人やイギリス人の名前も刻むことにしました。その理由は、アメリカのアルバート・C・ウェデマイヤー陸軍大將が『第2次世界大戦に勝者なし』という本を書いていて、その中で、アメリカの将兵は、戦争には勝ったけれども戦争が終わって家族の元に帰っても戦場で人殺しをした意識が尾を引いて家庭内暴力をふるったり、気が狂ったりして、人生が滅茶苦茶になっている。そのため何のために戦争に勝ったのか意味が分からなくなっている、と言うのです。

また、アメリカのムーアという映画監督は、職のないアメリカの若い人たちを海兵隊に引き入れる洗脳の模様を映画に撮っていました。その意味から沖縄戦に参加した米兵たちもしょせん戦争の犠牲者でしかないことが判明したからです。



平和の礎 (糸満市 提供)

「平和の礎」には、イギリス兵の名前も刻んでありますが、それは次のような理由からです。

沖縄戦が始まる前に、チャーチル首相がアメリカのルーズベルト大統領に、アメリカだけが戦争に勝ったらイギリスの発言権が弱くなるとの思いから、自分たちも沖縄戦に参加させてくれと頼みました。ところが、アメリカの総司令官のキング大將は、イギリスの支援なんかいらないと反対したけど、ルーズベルトが賛成したのでやむなく沖縄本島の戦争には参加させないで、宮古、八重山を攻撃させたわけです。その結果、平和の礎には、イギリス軍の犠牲者 82 名の名前も刻まれているわけです。

また沖縄戦では、朝鮮半島や台湾から日本軍に強制連行されてきて犠牲になった人々も少なからずいます。いまだ実数は確定していないけど、朝鮮からは数万人が沖縄戦に駆り出され 1 万人余が戦死したと言われていています。慰安婦にされた朝鮮女性たちも数千人にのぼるとのことです。何しろ沖縄という小さな島に 130 か所以上の慰安所があったことが判明しています。

ところが、日本政府厚生省（厚生労働省）にも韓国政府にも沖縄戦における犠牲者のリストさえないのです。このため、私たちは韓国の国立国会図書館で自ら調査をして、辛うじて 500 人の戦死者のリストを見付けました。ところが、創氏改名で韓国人の名

前はすべて日本名で記載されているのです。ご遺族から元の韓国名に戻して刻銘してほしいとの強い要望がありました。このため、韓国の名知大学の洪教授のゼミの学生にその作業を依頼し、費用は当方で負担しました。しかし、3か年半かけて調査してもいまだに韓国人 365 人、朝鮮民主主義人民共和国人 82 名しか復元できていません。また、台湾人も 34 人しか判明していない実情です。

ところで、平和の礎に敵国人の名前も刻んだ理由として米軍将校の本を挙げましたが、それとは別の理由もあります。

1950 年 6 月に、沖縄戦で九死に一生を得た私の母校沖縄師範学校の学友たちが、最後の決戦場摩文仁の海岸近くに死者たちを弔う沖縄師範健児の塔を設置し、戦死者全員の名前を刻みました。すると宮古、八重山などの離島から父母たちがやって来て、戦死した息子の名前を指で何度もなぞり涙を流しながら一日中坐り込んでいるのが毎日のように見受けられました。沖縄戦で戸籍簿なども焼失せしめられたので、塔に刻銘された一行の名前だけが息子がこの世に生きていたことを示す唯一の証拠たることに気付かされたのです。そのために私たちは、国籍を問わず、軍人・非軍人の別なく、沖縄戦で戦死したすべての人の名前を石に刻んで永久に残すわけにしたのです。たった一行の氏名がこの人の生存証明となることに否応なく気付かされたからです。



沖縄師範健児の塔 ～沖縄師範学校男子部等の生徒によって編成された鉄血勤皇隊を祀った碑～（那覇市 提供）

私の沖縄戦体験

沖縄戦当時、沖縄には 12 の男子中等学校と 10 の女学校がありました。そのすべての学校の十代の若い生徒たちが戦場に送り出されました。通常は十代の若者たちを戦場に駆り出す場合は、まず国会で法律をつくって、その法律に基づいてなすわけですが、沖縄戦の場合はその法律もないまま、すなわち法的根拠もなしに、すべての学校の生徒たちが戦場に送り込まれたのです。

私は当時、首里にあった沖縄師範学校の4年生になったばかりでしたが、私たちは、1丁の銃と120発の銃弾と2個の手榴弾で武装して、半袖半ズボンで戦場に出されました。絶対に捕虜になってはいけないと言われ、1個の手榴弾は敵に投げ付け、残りの手榴弾で自決すると2個の手榴弾を持たされたのです。

私たちは、それまで、今回の戦争はアジア民族を西洋の帝国主義者たちから解放する「神聖な戦争」と叩き込まれていました。そのため私たちは、その神聖なる戦争に命を捧げるということで、喜び勇んで戦場に出て戦った結果、過半数の十代の生徒たちが死んでしまいました。要するに文字どおり洗脳されていたわけです。

しかし、戦場で私が一番ショックを受けたのは、神聖なる戦争どころか、実際はそれこそ「醜さの極致」と言われるほどの醜い戦争だったことです。食べ物がなくなると、食べ物を持っている同じ日本の兵隊を殺害して奪い取るのです。そんなおぞましい姿を毎日のように目撃すると、何が「神聖な戦争か」と腹立たしくなり、すっかり人間不信に陥ったものです。

しかも、沖縄戦では、地元住民が必死になって家族用の壕を掘って入っているところへ日本兵が勝手に入り込んで来て、蓄えてある食糧などを全部奪い取ったり、住民を壕から追い出したりすることが頻繁に起きました。

住民の壕には子どもたちも入っています。その子どもたちが壕内の息苦しさにとまりかねて泣いたりすると、日本兵たちは壕の所在が敵兵にばれると言って、母親に子どもを殺せと命ずる。自らの手で殺せない母親は子どもを連れて壕外に出てあえなく砲弾の餌食になってしまう。そうでなければ、兵隊が母親の手から子どもを奪い取って殺害してしまう。そのため、住民は敵兵より友軍の日本兵を怖がるしまつでした。こんなおぞましい殺りく場面に連日のように出くわすと人間不信の念が募る一方で、こうした事態を生み出す戦争を憎悪するしかありませんでした。



火炎放射器で守備軍の敗残兵を掃討する米軍戦車（本島南部の海岸）
（NPO法人 沖縄国際平和研究所 提供）

1945年6月18日に、沖縄守備軍司令部の命令で沖縄学徒隊は解散になりました。私

たちは自由行動ができるようになったので、親しい学友2人と“3人で死ぬも生きるも一緒”と誓い合って本島北部への突破を目指して壕外へ出た瞬間、至近弾を喰らって散り散りになってしまいました。その際、私は右足底を抉り取られて歩くことができず、摩文仁海岸の岩の上を腹ばって進むよりありませんでした。後で知ったことですが、学徒隊が解散になったまさにその日に、私たち千早隊は最後の一兵になるまで敵中に身を潜めてゲリラ戦を闘え、と牛島守備軍司令官から隊長の益永薫大尉に命令が出されていました。ゲリラ戦とは、敵の弾薬庫に火を放って爆発させたり、敵の水源に毒をまいたりといった種類のものでした。



沖縄戦終焉の地糸満市摩文仁の丘から望む海（公益財団法人 沖縄県平和祈念財団 提供）

しかし、食料は全くないし水も飲めない状況でしたので、体は衰弱し切っていました。そんな時、摩文仁の集落から海岸へ通じる唯一の掘割を敵のM4戦車が押し寄せてきました。すると戦車のキャタピラの凄い轟音に、海岸の岩間にひしめいていた日本軍敗残兵や住民は、追いつめられて否応もなく海に飛び込むしかありませんでした。私もその一人でした。衰弱し切っている体でとても泳げる筈もないにもかかわらず、半ば無意識のうちに飛び込んだのです。

案の定 100メートルも泳がないうちに私は気を失い、気付いた時は、海岸に胸まで潮に漬かって倒れていました。どれ位そんな状況であったか今でも分かりません。こうして私は奇しくも生き残ることができたのです。

奇跡的に生き延びたとはいうものの、戦場での私の人間不信と戦争憎悪の念は消えることはありませんでした。私は、何故自分には砲弾が当たらず生きたのか、と海岸の岩間に身を潜めながら終日生きた意味を考えざるを得ませんでした。

その結果、自分は、死んだ恩師や学友たちの無駄な死に意味を与えるために、二度と醜悪な戦争をやらせないために、平和を創設すべく生かされたと思うようになりました。それで先に述べたとおり、県に入って平和行政の3本柱の実現に努め前2者は完成したのですが、3番目の国際平和研究所は時間切れでできませんでした。このため、県をや

めて後、当初個人の平和研究所を作り、一昨年からそれを沖縄国際平和研究所に名称を変えたわけです。沖縄をアジア太平洋地域の軍事拠点から世界に平和発信をする島に転換するのがその目的です。

沖縄の平和思想 ②

私が今一番望んでいるのは、どうすれば沖縄を基地の島から平和な島に変えていくことができるか、ということです。

私たちの祖先は、琉球王国時代に東南アジア諸国と緊密な貿易関係を結んで素晴らしい沖縄をつくっています。経済的に2度も黄金時代がありました。

近隣諸国と貿易関係を結ぶというのは、そのことが琉球王国の方針だったのではありません。拓殖大学の図書館長をしておられた、県出身の東恩納寛惇教授は、東南アジア諸国と貿易したのは、貿易自体が目的ではなくて、平和をつくるということが目的、国是（国の一番の基本方針）だった、その手段として貿易をしたのだ、と言っています。

先ほど、尚真王の時に一切の武器の携帯を許さなかったことには触れましたが、1609年に薩摩が琉球を侵略すると、薩摩は、琉球人が反乱を起こしてはいけないとさらに厳しく武器の携帯を禁止しました。しかも、貿易で武器を買い入れることも禁止したほどです。ですから沖縄は、琉球王国時代から500年以上も武器のない平和な社会を形成したわけです。それで、先ほども申しあげたように、沖縄の人たちの平和に対する思いは非常に強いわけです。

ところで、嘉手納飛行場は、米軍が最も重視している基地ですが、かつてそこには、一坪反戦地主が3000人ほどいました。地主たちが望む人々に一坪ずつ分けて売り、その人たちが地主になったのです。なぜそうなったかと言いますと、地主たちは、祖先から受け継いだかけがえのない大事な土地は、人殺しと結びつく軍事基地に貸すのではなく、人間の幸せに結びつく生産の場にしたい。物を作る土地にしたい。それ故に基地に貸すのではなくその考え方に賛成する人たちに一坪ずつ売り渡して一緒に反基地闘争に立ち上がったのです。



嘉手納飛行場（嘉手納町 提供）

ところがそのような人たちに、政府が不当な税金を課したり、いろんな不平等な処遇を繰り返したり、あるいは地主の親戚を懐柔して説得させたりして、今では反戦地主の数は200名足らずに減っています。

土地は人間の幸せに結びつくことに使いたい、ということに関しては、沖縄のガンジーと言われている伊江島の阿波根昌鴻さんも同じです。阿波根さんの家は、戦後米軍によって強制的に破壊された上、焼き払われてしまいました。つまり米軍は、銃剣とブルドーザーで強制的に土地を取り上げて軍事基地に作り変えたわけです。その時に、反対運動の先頭に立った阿波根さんは、米軍に立ち向かう時の民衆の守るべきルールを作っています。それは、人殺しをする米兵よりも、人間の幸せに結びつくいろんな作物を作っている農民の方が人間的に人格が上だから、相手の悪口を一切言うなとか、肩より手を上に上げたら写真にとられて米兵に暴力をふるったと口実をつくられるから、肩より手を上にあげるな、というものです。

そういうルールを作って徹底的に非暴力で抵抗し、伊江島の約60パーセントの土地の半分を返させています。そのため阿波根さんは、「沖縄のガンジー」と言われるようになりました。伊江島の阿波根さんの土地には「ヌチドタカラの家」があって、阿波根さんたちの闘争の資料や写真がたくさん展示されています。

沖縄には「イチャリバチョーデー」といって、行き合えばみんな兄弟みたいなものだという言い伝えがあって、外国人だろうが、国内の人だろうが、一度行き合えばみんな兄弟同様だとして大事にされます。首里城の入口には「守礼門」という門があり、それには、「守禮之邦」という扁額がかかっています。これは、沖縄には武器がなくて人々は非常に親切で、礼儀正しいので「守礼の邦」だと中国の皇帝から名づけられたのです。



守礼門の扁額 (那覇市 提供)

6・23 慰霊の日のこと

平和については、そういう歴史的な背景があります。しかし、沖縄戦では、そんな背景を無視して、それこそ平和とはまったく相反する酷い戦争が行なわれました。

先に、通常でしたら十代の若者たちを戦場にはまず法律をつくって、それに基づいてなすべきだと言いましたが、昭和20年6月23日に「国民義勇兵役法」という法律が初めてできました。この法律によりますと、男性は16歳から60歳まで、女性は19歳から40歳までを戦闘員として戦場に出すことが可能となったのです。

今沖縄では6月23日に慰霊祭をやっていますが、1960年頃までは6月22日にやっていました。沖縄戦では、牛島満司令官と長勇参謀長の二人が自決しましたが、沖縄守備軍首脳には今一人、八原博通という作戦参謀がいました。この人は捕虜になって生き延びましたが、戦後、読売新聞社から『沖縄決戦』という本を出しています。その本の中で、牛島司令官と長参謀長は昭和20年の6月23日の午前4時半から5時半の間に自決したと書いています。

それで、沖縄の観光協会の会長がこの本を読んで、それまで6月22日にやっていた慰霊祭を23日が正しいと替えさせたのです。

私たち沖縄師範学校の生徒たちは、沖縄守備軍司令部の直属隊でしたので、終始守備軍司令部と行動を共にしていました。



米軍が建てた牛島・長両首脳の墓標（NPO法人 沖縄国際平和研究所 提供）

ですから私たちは、2人の守備軍首脳が自決する前の6月18日に、摩文仁の司令部壕で司令官や長参謀長、八原作戦参謀をはじめ他の参謀たちが正装して最後の酒盛りをしているのを見ていました。そうして、翌19日の夕方には、参謀たちは軍服を脱いで沖縄住民の黒い着物に着替え、私の同僚3名を道案内として壕から出て行くのを見送ったのです。

参謀たちは一人残らず本土出身者たちで、色が白い上米軍が沖縄本島に上陸してからは一步も外に出ないため、ますます色が白くなっていました。彼らが着替えた沖縄の着

物は筒袖で、そのため、その後ろから見ると白い手足が浮き彫りになって見えるんです。その姿を見送りながら私は、ああ戦争は負けたんだなという思いを感じずにはおれませんでした。案の定、一行のうち道案内の仲眞君一人だけ生き残ってあとは全滅してしまいました。

ところで、守備軍首脳の中で一人だけ生き残って捕虜となった八原作戦参謀は、戦前にアメリカの日本大使館に勤めていたこともあって、英語もできる人で、一番知性がある参謀として尊敬されていました。戦後、米軍のG2という諜報部が行なった八原参謀が捕虜になったときの尋問記録を見ると、同参謀は、牛島司令官と長参謀長が自決する前に守備軍の壕を出ていて、両首脳の自決の現場にはいなかったことが分かりました。

私が生き延びて摩文仁岳の頂上に行ったとき、そこには米軍がつくった牛島司令官と長参謀長の墓がありました。石ころで2人の遺体を覆い、墓標がたてられていました。その墓標には6月22日死亡ということがはっきり書かれていました。このように沖繩戦の記述には事実と反することが少なからずあります。

最後の戦場での出来事

私は、その後も敗残の身を摩文仁海岸の岩間にひそめていました。すると、8月15日に、摩文仁海上の敵艦船から一斉に色とりどりの砲弾が空に打ち上げられ、まるで花火のように彩っていました。それを見て、近くにいた日本軍敗残兵たちが、特攻隊が反撃に出たといって手をたたいて喜んでいました。

その頃、私は、東京文理科大学の英文科を出た白井さんという兵長と行動を共にしていました。彼は私を壕の隅に連れて行くと、「あれは特攻隊の反撃ではなくて日本が降伏したので祝砲をあげているんだ。でも日本が負けていると言ったら2人とも敗残兵に殺されるから絶対に口外するな」と固く口止めされました。

摩文仁の集落には、米兵たちがテント小屋で、戦争に勝っているものですから昼夜の別なく、ラジオをかけたりレコードをかけたりしてどんちゃん騒ぎをしていました。そこへ海岸に身を潜めていた日本軍敗残兵たちが手榴弾を投げつけ、米兵たちが逃げ出すと食べ物や奪い取って、それで命をつないでいる有様でした。

同じ敗残兵とはいえ、私などが行くと食糧品は何一つ残っていませんでした。そのため私は、テント小屋に散乱しているアメリカの新聞や雑誌を持ち帰って白井さんに上げました。白井さんは、それらの新聞や雑誌を通して、この戦争の状況についてよく知っていたようでした。

白井さんから日本の降伏の話を聞かされたとき私は、戦争に負けた悔しさよりも、自分が英文を全く読めない無知さ、学問の無さにずっと悔しい思いをしたものです。当時、周囲は全部敵に囲まれていて生き延びる可能性のない時でしたが、私が白井さんに、「貴方はいいですね外国の言葉がこんなにすらすら読めて」と言ったら、彼は私に、「大田君、もし生き延びることができたら君も東京に出てきて英語を勉強したら」と一言言ってくれました。

この一言がその後の私の人生を文字どおり変えてしまいました。私は幸いにして生き残ることができ、迷うことなく英語の勉強をするべく東京の大学では英語、英文学を専攻したわけです。おかげで卒業後はアメリカに留学することもできただけでなく、世界中の多くの国々を回ることもできました。

アメリカに行って私は、学問をすることがいかに素晴らしいことかということを胸にしみて実感しました。ひとたび学問する楽しさを知ってしまったら、他の楽しみなどは比較にならないほど小さくなるのです。そういう思いを私はしみじみと実感しています。

辺野古への移転を拒否する理由

私が絶えず努力しているのは平和をつくるということです。平和をつくるといっても、沖縄にはあまりにも平和創設の阻害要因たる米軍事基地が多すぎます。

今一番問題になっている普天間飛行場を辺野古に移すことですが、これは世論調査を見ると、沖縄では83%が反対しているにもかかわらず、本土の方では過半数の56%が賛成しています。こういう数字が出てくるのは、本土の人々は辺野古に予定されている基地の中味についてご存じないからだと思います。

つまり、95年9月に米兵による少女暴行事件が起きたとき、沖縄の85,000人もの住民が集まって抗議大会を開きました。すると日米両政府は、沖縄住民の怒りを静めるために、SACO（サコ、沖縄に関する特別行動委員会）というものを作って、在沖米軍基地の削減を図りました。そして、両政府はSACOの最終報告（1996年12月）を出しました。ところが、日本政府の最終報告とアメリカ政府の最終報告の中身が大幅に違っているのです。



普天間飛行場（沖縄県 提供）

日本政府は、普天間飛行場を辺野古に移したら5分の1に縮小する、すなわち、現在の普天間飛行場の滑走路の長さは2800メートルだけど、それを1500メートルに縮め

る、建設期間は5年から7年、建設費用は5000億円以内と発表しました。

ところがアメリカ政府は、建設期間は少なくとも10年かかる。そして、MV22 オスプレイを24機配備する。このオスプレイは絶えず事故を起こしていて「未亡人製造機」とか「空飛ぶ棺桶」などと言われているほどなのです。それが安全に運航できるようにするためには2か年の演習期間が必要だと。従って、少なくとも使い始めるまでには12か年ほどかかる。費用が1兆円かかるだけでなく、運用年数40年、耐用年数200年になる基地をつくる、と書いてあるのです。

耐用200年にも及ぶ基地を作られたら沖縄は半永久的に基地との同居を強いられることになるので、絶対受け入れてはならないと私たちは拒否したわけです。

基地問題と沖縄戦

そもそも普天間飛行場の移設問題は、20年程前にさかのぼります。1996年1月に、わが沖縄県は日米両政府に対して「基地返還アクションプログラム」という計画書を提出して、これを日米両政府の正式の政策にしてほしいと要望しました。

基地返還アクションプログラム(素案)の返還の期間別施設名一覧表

返還の期間	施設数	施設名
第1期 (~2001年)	10	①那覇港湾施設 ②普天間飛行場 ③工兵隊事務所 ④キャンプ桑江(施設一部) ⑤知花サイト ⑥読谷補助飛行場 ⑦天願棧橋 ⑧ギンバル訓練場 ⑨金武ブルー・ビーチ訓練場 ⑩奥間レスト・センター
第2期 (2002~2010年)	14	①牧港補給地区 ②キャンプ瑞慶覧 ③キャンプ桑江 ④泡瀬通信施設 ⑤楚辺通信所 ⑥トリイ通信施設 ⑦瀬名波通信施設 ⑧辺野古弾薬庫 ⑨慶佐次通信所 ⑩キャンプ・コートニー ⑪キャンプ・マクトリアス ⑫八重岳通信所 ⑬安波訓練場 ⑭北部訓練場
第3期 (2011~2015年)	17	①嘉手納飛行場 ②嘉手納弾薬庫地区 ③キャンプ・シールズ ④陸軍貯油施設 ⑤キャンプ・シュワブ ⑥キャンプ・ハンセン ⑦伊江島補助飛行場 ⑧金武レッド・ビーチ訓練場 ⑨ホワイト・ビーチ地区 ⑩浮原島訓練場 ⑪津堅島訓練場 ⑫鳥島射爆撃場 ⑬出砂島射爆撃場 ⑭久米島射爆撃場 ⑮黄尾嶼射爆撃場 ⑯赤尾嶼射爆撃場 ⑰沖大東射爆撃場
計	41	

※本県に所在する米軍施設は40施設であるが、キャンプ桑江が、部分的に第1期と第2期に分かれるため、延べ施設数としては41施設となる。

※資料 沖縄県提供

その中身は、2001年までに一番返しやすところから10の基地を返してくれ、2010年までにさらに14の基地を、そして2015年には嘉手納飛行場を含め残りの17の基地を全部返してほしいと。そうすれば、2015年には沖縄は基地のない平和な社会を取り戻すことができるから、というわけです。すると、日米両政府は話し合っ、96年4月にクリントン大統領が来日されるということになっているので、その前に基地削減策を講じることになりました。

その頃、橋本総理の密使として、秩父セメントの諸井虔会長が来沖され、2人だけで話し合いたいと言われ、「橋本総理が、沖縄が基地を引き受けてくれないので非常に心労しておられるから何とか協力してくれ」とのことでした。

しかし、私は諸井さんに、「沖縄の十代の生徒たちは何ら法的根拠もないままに駆り出されて過半数が犠牲になったので戦争と結びつく基地だけは到底受け入れることはできません」と申し上げました。

沖縄戦では沖縄の総人口の3分の1が犠牲になりました。当時沖縄の人口は45万から47万位といわれていました。ところが米軍は、この総人口を上回る54万8,000人という大軍勢で押し寄せて来たのです。沖縄を守っている日本軍は、正規の軍隊と地元からの防衛隊、さらには私たち学徒隊を含めても10万人そこそこでした。敵の5分の1の軍勢でしかないのです、とても勝ち目はありません。あまつさえ制空権も制海権も米軍が完全に握っているのです、勝てるはずがないのです。そのため東京の大本営も、ひとたび敵が沖縄に上陸したら沖縄の軍官民は玉砕するしかないと最初から諦めきっていたようです。



艦砲射撃を受けて破壊されつくした首里一帯～艦砲射撃でできた穴に水がたまっている～ (NPO法人 沖縄国際平和研究所 提供)

それにもかかわらずあえて戦争をやらせたのは、米軍が沖縄に上陸した時に、日本本土の防衛体制は60%しか仕上がっていませんでした。そのような時に米軍が日本本土に上陸したらひとたまりもなく日本は降伏に追い込まれるので、1日でも長く米軍を沖

縄に釘づけにしておいて、その間に日本本土の防衛体制を完成しようとしたわけですよ。

そのような背景から、沖縄の人たちは今以て、沖縄は日本本土を防衛する防波堤にされたとか捨て石にされた、と文句を言っているのです。

先ほど6月23日に国民義勇兵役法が公布されたことに触れましたが、沖縄ではその法ができる前すでに12歳から70歳くらいの老人まで、根こそぎ動員されて戦場に送り込まれたのです。日本の兵隊が勝手に、お前らは軍隊に引っ張られている、などと言って戦場に出すわけです。そのように超法規的に住民が戦場に動員されて戦わされたのです。

いまだ続く“沖縄戦”

現在、那覇市の北西部に「おもろまち」という新しい町ができています。新都心とも呼ばれ、高層ビルが建ち並んでいます。そこは以前米軍政府の住宅地で、1200戸位の住宅が建っていました。その頃、地元住民で雇用されたのはせいぜい130名位でしたが、今はもう1万人余の人が雇用されていて、当時に比べて所得も比較にならないほど増大しています。

その町の一角に小高い丘があって、沖縄戦当時、その丘をめぐる日米両軍間で激しい戦闘が展開しました。この丘を米軍は、シュガーローフ（砂糖の塊）と呼んでいました。

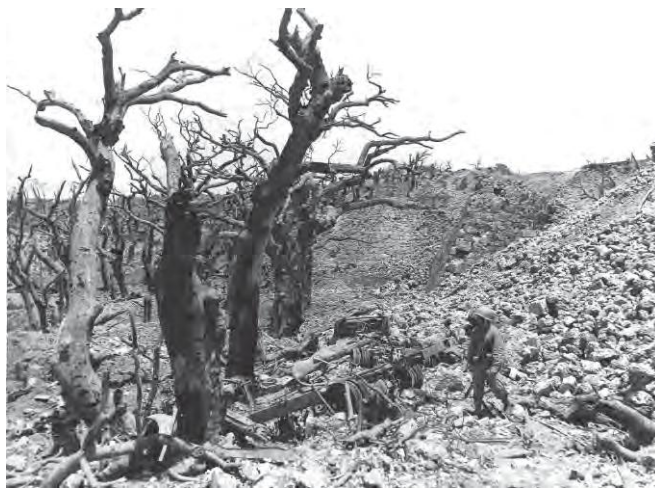


戦闘終了後のシュガーローフ（NPO法人 沖縄国際平和研究所 提供）

沖縄戦の激しい戦闘の中でもこのシュガーローフの戦闘はとりわけ激しいもので、『シュガーローフの戦い』という本がアメリカで出ているほどです。そのため沖縄戦に参加した米兵で、シュガーローフという名前を知らない人は一人もいないと言われるくらいです。この小高い丘は、首里城の正面に向かい合っているので、守備軍にとってこの丘を取られると、首里城の地下30メートルにある守備軍司令部が危なくなる。そのため昼に米軍が占領したら、夜には日本軍が取り返すという具合に、1週間の間、沖縄

戦の中でもっとも激しい戦闘が行なわれたのです。

沖縄戦とはどういう戦争だったのかというと、『ニューヨーク・タイムス』紙のハンセン・ボールドウィンという有名な従軍記者が「沖縄戦は醜さの極致だ。これ以外どう説明のしようもない。これほど醜い戦争はかつてなかった。生きるために戦う米兵と、死ぬために戦う日本兵との一大決戦で、これまでこんな激しい戦闘はなかったし、これからもないだろう」と報じるほどです。



完全に破壊された首里城（NPO法人 沖縄国際平和研究所 提供）

激しい戦闘が繰り返されたこのシュガーローフでは、わずか1週間に米兵が1800名くらい精神異常をきたしました。そのため、米軍はサンフランシスコから特別な病院船を仕立てて、エール大学やハーバード大学など一流の大学の精神病理学の教授たちを沖縄に連れて来て特別な治療をさせました。

その中にエール大学のウィリアム・クラーク・マローニーという精神病理学者がいて、彼は実際に米軍が戦っている戦場を見て回りました。すると、米兵が狂った戦場を沖縄住民が右往左往しているけど彼らには精神異常者が1人も見受けられない、として調査をして、『沖縄の教訓』という本を書いています。

その本の中で、マローニー教授は、結論的に言えば、「米国と沖縄では子どもの育て方が違う。アメリカでは物心がついたら個室を作ってそこで子供たちは生活する。そのため、親子や兄弟同士のスキンシップが薄れて、戦争という極限状況下になると、異常をきたす。ところが、沖縄では個室なんかなくて、みんな一緒に同じ部屋に住んでいる。しかも上の子が下の子を一日中背中に負ぶったり抱っこしたりして生活しているからスキンシップが緊密で、精神病をきたす人がいない」と結論を出しているのです。

ところが、その本の最後の方で、しかし子どもの時にこのような激しい戦場体験をすると、大人になって必ず異常をきたすだろうと予言しています。

その予言が現在、実体化しているのです。戦後も70年たち、当時の子どもたちが今では70代になっていますが、その人たちに心を病む人が増えていると言われています。

日本や沖縄の精神病理学者たちが調査を始めたところ、沖縄戦の体験が原因となっていることを明らかにしています。しかも心を病んでいる人は、全国平均の3倍くらいいるのではないかとのことです。

沖縄にはまだ70年前の不発弾の問題、未収集の遺骨の問題があります。沖縄戦では推定20万トンもの膨大な量の爆弾が投下されたと言われています。そのうちの1万トン位が不発弾となって地中に埋まっているとのこと。それを30トンとか50トンとか、毎年億単位の予算を使って自衛隊が処理しているのですが、専門家に言わせると、処理し終わるにはあと60年から80年もかかるようです。それに、戦没者の遺骨もまだ2500体ほどが未収骨のままになっていて、毎年収骨している有様です。その上、心を病む人々が急激に増えている実態なので、沖縄戦は今も続いているという次第です。

辺野古の海は住民の生活の源

そのような状況下で、普天間基地の移設先の辺野古では、戦争体験者の80代から90代の年配の人たちが18年間も自分たちの生活を犠牲にして座り込んで抵抗しています。なぜ戦争を体験したおじいちゃんおばあちゃんたちが、そんなに長く生活を犠牲にしてまで座り込んでいるかと申しますと、辺野古は、山ばかり多くて田畑は多くありません。そのため戦争中は、付近の人々は食べ物がなくて餓死寸前に陥った時に海から魚を捕ってやっと命をつないだのです。

また、戦争が終わって1年間ほど沖縄には食物など何もありませんでした。米軍が日本軍を攻めるために蓄えていたテント小屋とか食料品とか医薬品とかを無償で払い下げて、住民はやっと命をつないだわけです。そのため辺野古付近の住民は、子どもに教育を受けさせたくても、ノートも鉛筆も買えない。田畑がないから換金作物もほとんどないのです。そんなとき辺野古の海から魚を捕って、これを売って学用品を買って子どもたちに教育を受けさせた。このように辺野古の海は、いわば生活の一番大事な源になっているのです。

また、私が県にいた時、3か年かけて全沖縄の自然環境を調査して、開発を認める区域と一部しか開発を認めない区域、さらには一切の開発を認めないで現状のまま保全すべき区域とを指定しました。辺野古の海、大浦湾一帯は一切開発を認めないで現状のまま保全すべき第1位にランク付けされた区域です。辺野古と大浦湾の海は資源が非常に豊かなので、エコツーリズムとって、自然を楽しむ若者たちのエコツーリズムのメッカになっています。ですから、そこに基地をつくられたら付近住民たちが爆音に苦しむだけでなく経済的にも苦境に陥ることになります。それ故に多くの人たちが反対しているわけです。

辺野古移転、米軍側の真意

先ほど、本土では辺野古に普天間基地を移すのに過半数の人々が賛成している、と世論調査の結果を申しましたが、1998年頃だったと思いますが、普天間飛行場の副司令

官のトーマス・キング氏が NHK のインタビューに答えて、「普天間飛行場を辺野古に移す場合、普天間の代替基地をつくるのではなくて、20 パーセント軍事力を強化した基地をつくる」と語っています。強化の中身は、一つには MV22 オスプレイを 24 機配備すること、今一つは、普天間飛行場からヘリ部隊がイラク戦争やアフガン戦争に出撃するときに爆弾を普天間では積めないのが嘉手納に行って積んでいて、非常に不便なので、辺野古には陸からも海からも自由に爆弾を積める施設をつくる。これが軍事力を 20 パーセン強化する中身だというわけです。そうすると、普天間飛行場の年間の維持費の 280 万ドルが、辺野古に移したら一挙に 70 倍くらいに跳ね上がって、2 億ドルになってしまう。これを日本の税金で賄ってもらおうというわけですよ。



F-16CMV-22Bオスプレイ輸送機（嘉手納町 提供）

辺野古への移転計画の契機

普天間飛行場は、1996 年 1 月に、私たちが「基地返還アクションプログラム」をつくって、2015 年までに基地を全部返してくれと日米両政府に要望した時に、クリントン大統領が来日するというので、橋本総理から最優先に返してほしい所はどこかと聞かれたので、私は普天間飛行場ですと申し上げました。周辺には 16 の学校があるだけでなく、クリアゾーンといって、滑走路の延長上には一切建物をつくってはいけないし、人が住んではいけないことになっていますが、3000 人余の市民がひしめて住んでいます。一番危険だから普天間を真っ先に返してほしいと言ったら、クリントン大統領が来日される前に、モンデール駐日大使と橋本総理が話し合って、2001 年までに普天間を含めて 11 の基地を返すことを日米両政府が合意したわけです。

私たちはとても喜んだのですが、後になって、11 返すけれどもそのうちの 7 つまでは県内に移設するというわけです。ですから私たちは、容認しませんでした。

嘉手納とか普天間飛行場の米軍の兵舎は以前はプレハブでできていました。それが老朽化して現在コンクリートに造り変えています。もし 7 つの基地が県内に移設されると、みんなコンクリートで作るのですから、耐用年数が尽きるまで米軍は自由勝手に使用できるわけです。ですから私たちは、到底受け容れることはできない、と拒否したわけです。

半世紀前からの辺野古移転計画

驚いたことに普天間飛行場を辺野古に移す計画は、実は1960年代に発生していたのです。1965年に沖縄を日本に返還する話が始まりましたが、それまでの20年間、沖縄は米軍の直接占領下であって、日本国憲法は適用されませんでした。ところが1953年から58年まで、沖縄は島ぐるみの土地闘争という反米闘争が起きました。それ以前は、沖縄戦で命を救ってくれたのは米兵だったこともあって、沖縄の人々は米軍に対して感謝の気持ちさえ持っていました。

ところが、米軍が1953年に「土地収用令」という悪法を布令で公布して、農家の土地を強制的に取り上げて軍事基地に変えていったので、初めての反米大衆運動が起きたわけです。そのことを米兵は知っているのも、もしも沖縄が日本復帰して日本国憲法が適用されるようになったら、沖縄住民の権利意識がますます強まって、米軍が一番重要視している嘉手納以南の、県都那覇市に一番近いところ、つまり人口が一番多いところに集中している基地の運用ができなくなる恐れがあるとして、これをひとまとめにしてどこかに移そうという計画を立てたのです。そしてアメリカのゼネコンを呼んで、西表島から本島北部の本部港まで全部チェックさせた結果、最終的に辺野古の海、大浦湾が一番いいという結論に達したのです。



辺野古の海 (名護市 提供)

そのあげく、普天間飛行場の青函面まで大浦湾に造っていました。那覇港は今米軍が管理していますが、水深が浅くて航空母艦を入れることができません。ところが、大浦湾は水深が30メートルあるので、航空母艦も強襲揚陸艦も入れることができます。そのため普天間飛行場の代替滑走路をつくるだけじゃなくて、米海軍が航空母艦を入れる巨大な栈橋をつくる計画でした。一方反対側の陸地には、米陸軍が核兵器を納入できる巨大な弾薬庫をつくる計画を立てていたわけです。

ところが、当時はベトナム戦争のさなかで軍事費に金を使い過ぎて、米軍は金がありませんでした。当時は、移設費も建設費も維持費も全部、米軍の自己負担でした。しょうがないので、米政府は日本政府と密約を結んで、沖縄が日本に復帰して日本国憲法が適用されても、基地の自由使用は認める、核兵器はいつでも沖縄に持ち込めるよう

にする、と双方が合意したので安心して折角作った計画を放置していました。

その計画が半世紀ぶりに息を吹き返しているわけです。しかも今では、移設費も建設費も維持費も思いやり予算も、すべて日本の税金で負担することになっています。

実際に辺野古に基地をつくりますと 1 兆円から 1 兆 5 千億円もかかると言われています。この巨大な基地ができれば、日本の納税者の頭上にどれだけの財政負担がオツカぶられるかと懸念せざるを得ません。

基地返還後の実情

日本本土の国会議員の多くは、沖縄に米軍基地がなければ経済が破綻すると言っていますが、事実はそうではないのですよ。今ではもう、基地が返されたら県民の雇用は確実に 10 倍は確保できるだけでなく、所得も場所によっては 100 倍から 200 倍も増えることが判明しています。ちなみに普天間飛行場が返されて民間に利用されると、それこそ今の何十倍もの雇用が確保できるだけでなく、所得も比較にならないほど拡大できるのです。

いきおい、本土で考えられている沖縄の実態と現実の姿とがあまりにもかけ離れすぎているのです。そのためあらぬ誤解が生じたりするのです。

沖縄と憲法

最後に、沖縄と憲法のことについて一言触れておきたいと思います。

憲法と言えば、沖縄ほど憲法と縁のないところは日本全国どこにもないと思います。また、逆に沖縄ほど憲法を大事にしているところもありません。

大日本帝国憲法ができた時、また現行憲法ができた時も沖縄代表は国会に出ていませんでした。大日本帝国憲法ができた後に、沖縄代表が国会に出るのは他府県よりも 30 年も遅れています。現憲法の場合も 20 年余りも遅れています。戦後 20 年余も沖縄では憲法が適用されていませんでした。

憲法が適用されないと人間は人間らしく生きていけません。憲法には人間らしく生きていく基本的人権のほか、もろもろの権利が具体的に規定されています。したがって、憲法が適用されなければ人間は人間らしく生きていけないわけです。沖縄の歴史を振り返ってみますと、沖縄の人間も、本土の人間も、アメリカの人間も、みんな同じ人間です。しかるに、沖縄の人々は人間らしく扱われたことはないわけです。絶えず他人の目的を達成する手段に供されたり物扱いされたりしてきたのです。ですから、沖縄の人々は、俺たちも人間だから人間らしく扱ってほしいと、それには平和憲法を適用してもらうのが一番の近道だということで、平和憲法の元に帰るということを日本復帰運動のローガンに掲げてきたのです。

平和な沖縄をめざして

ところが、日本への復帰が実現して 44 年たちますが、日本政府の対沖縄政策はいじ

めに満ちていて、極端ないびつをもたらしています。そのため、こんな日本についていくべきじゃなかった、日本は帰るべき祖国ではなかったということで、独立論が広まってきました。以前の独立運動というのは政治家ばかりがやっていましたが、最近の独立運動は、大学の教授たちが推進しています。大学の教授の間には琉球民族独立総合研究学会という学会もできています。



講演会場の様子

そういう中で、沖縄の人々が必死に取り組んでいるのが、沖縄を「基地の島」から基地を撤去させて、「平和発信の島」につくり変えていこうとしていることです。何故かと言いますと、軍事評論家が一致して指摘していることですが、次に戦争が起きたら、真っ先に嘉手納基地が攻撃的的になって、沖縄が全滅させられるというわけです。沖縄の人たちは、沖縄戦を体験して、二度と再び沖縄を戦場にしない、そのためには真先に軍事基地をなくすることだと考えています。「基地返還アクションプログラム」を作ったのもそうした考えからです。こうしたことを実現するためには、本土の方々のご理解と協力がなければなかなか実現することはできません。

にもかかわらず最近の日本は、世界に誇るべき日本国憲法を改悪して、再び戦争のできる国に変えようと必死になっています。日本国憲法がいかに素晴らしい憲法かを改めて想起するため、今一度、永井隆先生の幼いお子さんたちへの遺言を振り返ってみましょう。

いとし子よ……永井隆さんの遺言

長崎大学医学部の永井隆教授を皆さんご存知でしょう。永井隆先生は奥さんを原爆で失くされ、ご自分も被爆され、確か43歳でお亡くなりになるんですが、その短い生涯を被爆者たちの治療に捧げた方です。この方に、幼い「誠一」（まこと）という男の子と、「カヤノ」という女の子がいました。先生はお亡くなりになる前に「いとし子よ」

という遺書を残して、その中で、憲法を大事にしてほしいという趣旨のことをおっしゃっています。それを紹介して話を終らせていただきたいと思います。

いとし子よ。

あの日、イクリの実を皿に盛って、母の姿を待ちわびていた誠一よ、カヤノよ。
お母さんはロザリオの鎖ひとつをこの世に留めて、ついにこの世から姿を消してしまった。

そなたたちの寄りすがりたい母を奪い去ったものは何であるか？

——原子爆弾。…いいえ。それは原子の塊である。

そなたの母を殺すために原子が浦上へやって来たわけではない。

そなたたちの母を、あの優しかった母を殺したのは、戦争である。

戦争が長びくうちには、はじめ戦争をやり出したときの名分なんかどこかに消えてしまい、戦争がすんだころには、勝ったほうも負けたほうも、なんの目的でこんな大騒ぎをしたのかわからぬことさえある。そうして、生き残った人びとはむごたらしい戦場の跡を眺め、口をそろえて、

——戦争はもうこりごりだ。これっきり戦争を永久にやめることにしよう！

そう叫んでおきながら、何年かたつうちに、いつしか心が変わり、なんとなくもやもやと戦争がしたくなってくるのである。

どうして人間は、こうも愚かなものであろうか？

私たち日本国民は憲法において戦争をしないことに決めた。…

わが子よ！

憲法で決めるだけなら、どんなことでも決められる。

憲法はその条文どおり実行しなければならぬから、日本人としてなかなか難しいところがあるのだ。

どんなに難しくても、これは善い憲法だから、実行せねばならぬ。

自分が実行するだけでなく、これを破ろうとする力を防がねばならぬ。

これこそ、戦争の惨禍に目覚めたほんとうの日本人の声なのだよ。

しかし理屈はなんとでもつき、世論はどちらへでもなびくものである。

日本をめぐる国際情勢次第では、日本人の中から憲法を改めて、戦争放棄の条項を削れ、と叫ぶ声が出ないとも限らない。

そしてその叫びがいかに、もっともらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかもしれない。

もしも日本が再武装するような事態になったら、そのときこそ…誠一よ、カヤノよ、たとい最後の二人となっても、どんな罵りや暴力を受けても、きっぱりと“戦争絶対反対”を叫び続け、叫び通しておくれ！

たとい卑怯者とさげすまされ、裏切り者とたたかれても“戦争絶対反対”の叫びを守っておくれ！

敵が攻め寄せたとき、武器がなかったら、みすみす皆殺しにされてしまうではないか？——という人が多いだろう。

しかし、武器を持っている方が果たして生き残るであろうか？

武器を持たぬ無抵抗の者の方が生き残るであろうか？…

狼は鋭い牙を持っている。それだから人間に滅ぼされてしまった。

ところがハトは、何ひとつ武器を持っていない。

そして今に至るまで人間に愛されて、たくさん残って空を飛んでいる。…

愛で身を固め、愛で国を固め、愛で人類が手を握ってこそ、平和で美しい世界が生まれてくるのだよ。

いとし子よ。

敵も愛しなさい。愛し愛し愛しぬいて、こちらを憎むすきがないほど愛しなさい。

愛すれば愛される。愛されたら、滅ぼされない。

愛の世界に敵はない。敵がなければ戦争も起らないのだよ。

「鳩と狼」～いとし子よ より (永井 隆 作)

これで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

【用語説明】 (フリー百科事典「ウィキペディア」及び Weblio 辞典ほかを参照)

ヨハン・ガルトゥング

1930 年生まれ。ノルウェーの社会学者、数学者。平和研究、紛争研究の開拓者、また第一人者。戦争のない状態を平和と捉える「消極的平和」に対し、貧困、抑圧、差別など構造的暴力のない状態を「積極的平和」とする概念を提起し、平和の理解に画期的な転換をもたらした。

集団的自衛権

1945 年に署名・発効した国連憲章の第 51 条において初めて明文化された権利。ある国家が武力攻撃を受けた場合に直接に攻撃を受けていない第三国が協力して共同で防衛を行なう国際法上の権利。その本質は、直接に攻撃を受けている他国を援助し、これと共同で武力攻撃に対処するというところにある。

特定秘密保護法（特定秘密の保護に関する法律）

平成 26 年 12 月 10 日、施行。この法律は、安全保障上の秘匿性の高い情報の漏えいを防止し、国と国民の安全を確保するためのもの。日本の安全保障に関する事項のうち「特に秘匿を要するもの」について行政機関における「特定秘密の指定」、「特定秘密の取扱いの業務を行う者」に対する「適性評価の実施」、「特定秘密の提供」が可能な場合の規定、「特定秘密の漏えい等に対する罰則」等について定め、それにより「その漏えいの防止」を図り、「国及び国民の安全の確保に資する」趣旨であるとされる。

有事法制

有事（武力衝突や侵略を受けた場合など）に際し、軍隊（自衛隊）の行動を規定する法制のこと。日本では、有事への対処を優先するために私権を制限することや憲法の平和主義との整合性で長年にわたり論議があったが、2003（平成 15）年 6 月 13 日に武力攻撃事態対処関連 3 法が成立し、有事法制の基本法である武力攻撃事態対処法が施行されたことで法制の枠組みが整備された。

国民保護法（武力攻撃事態等における国民の保護のための措置に関する法律）

日本が武力攻撃を受けたときや大規模テロにさらされたとき（これらは武力攻撃事態に準ずる扱いとして緊急対処事態という）、武力攻撃から国民の生命、身体及び財産を保護し、国民生活等に及ぼす影響を最小にするための、国・地方公共団体等の責務、避難・救援・武力攻撃災害への対処等の措置が規定されている。2004 年に成立。

自衛隊法（昭和二十九年六月九日法律第百六十五号）第 3 条

（自衛隊の任務）

第三条 自衛隊は、我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略及び間接侵略に対し我が国を防衛することを主たる任務とし、必要に応じ、公共の秩序の維持に当たるものとする。

2 自衛隊は、前項に規定するもののほか、同項の主たる任務の遂行に支障を生じない限度において、かつ、武力による威嚇又は武力の行使に当たらない範囲において、

次に掲げる活動であつて、別に法律で定めるところにより自衛隊が実施することとされるものを行うことを任務とする。

- 一 我が国周辺の地域における我が国の平和及び安全に重要な影響を与える事態に対応して行う我が国の平和及び安全の確保に資する活動
 - 二 国際連合を中心とした国際平和のための取組への寄与その他の国際協力の推進を通じて我が国を含む国際社会の平和及び安全の維持に資する活動
- 3 陸上自衛隊は主として陸において、海上自衛隊は主として海において、航空自衛隊は主として空においてそれぞれ行動することを任務とする。

オスプレイ

アメリカ軍の最新鋭輸送機(ティルトローター機)の愛称。回転翼軸の角度を変更することによる垂直/水平飛行を可能とした垂直離着陸機であり、固定翼機とヘリコプターの特性を併せ持った機体で、従来の方式のヘリコプターに比べ、高速かつ航続距離に勝る特性がある。

仲原善忠(なかはらぜんちゅう)

1890(明治23)年、久米島生まれ。おもろの研究者。伊波普猷亡き後、『おもろ新釈』を発表して、おもろ研究を深化発展させ、『おもろさうし辞典・総索引』などを刊行。1964(昭和39)年没。

尚真王

1465～1526年。琉球王国第二尚氏王統の第3代国王(在位1477年～1526年)。在位中、海外交易、八重山・与那国を征服しての王国の統一、国内諸制度の形成・整備等を行い、琉球王国の最盛期を現出した。

おもろさうし

沖縄最古の歌謡集。12世紀から17世紀にかけての沖縄各地で歌われていた叙事的歌謡を首里王府が編纂。全22巻、1554首が収録されている。沖縄の歴史、文学を研修するための基本文献とされる。

遣老説伝

沖縄に古くから伝わる民話、自然の異変、百姓の善行など、口碑伝説を集めた書物。『球陽』の編纂(1745年)以前、18世紀初期の編纂とみられる。142話が収められている。

アルバート・コアディ・ウェデマイヤー

1897～1989年。アメリカ陸軍の軍人。第二次世界大戦後期の中国戦線およびビルマの戦いにおいて米陸軍と国民革命軍を指揮し、日本軍と対峙。大戦後の冷戦期では、ベルリン封鎖に対する空輸作戦の主要な支持者となり、反共主義者の大物の一人としてもてはやされた。

平和の礎(いしじ)

平和の礎は、世界の恒久平和を願い、国籍や軍人・民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなった全ての人々の氏名を刻んだ祈念碑。1995(平成7)年6月に太平洋戦争・沖縄戦終結50周年を記念して沖縄県(県知事;大田昌秀)によって建立された。糸満市の沖

縄平和祈念公園内の平和の広場に建てられ、屏風型の花崗岩に銘が刻まれている。現在も追加刻銘がされており、刻銘者数は2015（平成27）年6月時点で24万1,336人。

創氏改名

日本が朝鮮支配に際して、朝鮮人の家族制度と名前を日本式に変更しようとした政策。皇民化政策の一環として、1940（昭和15）年、朝鮮総督府令で制定された。本籍地を朝鮮に有する朝鮮人（日本臣民）に対し、新たに「氏」を創設させ、また「名」を改めさせた。

東恩納寛惇（ひがしおんな かんじゅん）

1682（明治15）年、那覇市生まれ。歴史家。東京帝国大学在学中から沖縄の歴史、地理研究に取り組み、実証主義史学で数々の論文を発表した。『全集』（全10巻別巻1）がある。1963（昭和38）年没。

阿波根昌鴻（あはごん しょうこう）

1901（明治34）年生まれ。伊江島の米軍土地接収に抵抗、乞食行進で米軍の非道を訴えた。反戦地主の象徴的存在。84年に反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」を建設、99年には資料館と宿泊研究施設を運営する「わびあいの里」を建設した。

ポツダム宣言

1945年7月26日にアメリカ合衆国大統領、イギリス首相、中華民国主席の名において日本（大日本帝国）に対して発された、「全日本軍の無条件降伏」等を求めた全13か条から成る宣言。他の枢軸国が降伏した後も交戦を続けていた日本はこの宣言を受諾し、第二次世界大戦が終結した。

基地返還アクションプログラム

沖縄県が、21世紀に向けた沖縄のグランドデザインである「国際都市形成構想」の具体的な展開を図るために、基地所在市町村の承認を経て1996年1月に策定し（素案）、同10月に政府に提出されたもの。2015年までに3段階に分け、米軍基地の計画的かつ段階的な返還を行ない、最終的に全面返還を目指すもの。

強襲揚陸艦（きょうしゅうようりくかん）

陸上兵力を輸送し、主にヘリコプターを利用して上陸させる能力を持った艦艇。最近では、大型化し、兵員・資材揚陸用の輸送ヘリに加えて支援用に垂直離着陸攻撃機を搭載して、戦艦並みの巨艦となっている。

永井 隆（ながいたかし）

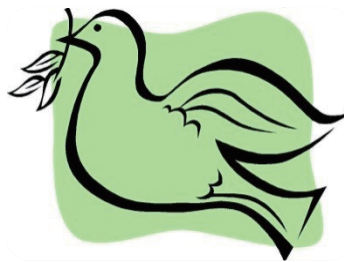
1908（明治41）年生まれ。医学博士、随筆家。1945年8月9日、長崎市に原子爆弾が投下され、爆心地から700メートルの距離にある長崎医大の診察室で被爆。右側頭動脈切断という重傷を負うも、布を頭に巻くのみで救護活動にあたった。自宅の台所跡から骨片だけの状態となった妻の遺骸を発見し埋葬した。子供と義母の疎開地三山で救護本部を設置して被爆者の救護に当たるが傷口からの出血が止まらず昏睡状態を繰り返す。「原子爆弾救護報告書」「原子病と原子医学」などを執筆。1951（昭和26）年没。著書に『長崎の鐘』や『この子を残して』等。

イクリ (郁李)

バラ科の落葉小低木、園芸植物、薬用植物。

琉球民族独立総合研究学会

沖縄の日本からの独立を目指し、松島泰勝（龍谷大学教授）、友知政樹（沖縄国際大学教授）、桃原一彦（沖縄国際大学准教授）、親川志奈子（オキスタ 107 共同代表）、照屋みどり（しまんちゅスクール）らが 2013 年 5 月に設立した学会。



非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝 塚 市





宝塚市平和モニュメント「火の鳥」



平和の鐘

いま、語りつぐ 平和への願い XI

平成28年（2016年）3月発行

編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課

監修 NPO法人沖縄国際研究所 編集協力 佐原一哉

宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141(代表)